

原田マハ氏が著した、妻チヤの生涯と視点から見た夫・版画家・棟方志功を描いた小説『板上に咲く』は実に面白かった。私は志功の版画を初めて見たのは、倉敷の大原美術館であった。土から立ち上るようなエネルギーを感じ、見入った記憶がある。志功は青森県出身で、ゴッホの「ひまわり」を見て感動し、「ワぁ（私は）ゴッホになる」と叫び、世界に認められた版画家になった。また、テレビで、極度の近視のため、板に目をくっつけて彫る姿を幾度も見た。それくらいのことしか、知らなかった。『板上に咲く』を読んで、小説だからエンターテイメント風な記述もあるだろうが、芸術家の常軌を逸した生き方と情熱に感嘆した。志功は貧しい家庭で育ち、高い教育を受けることができなかったが、子どもの頃から、絵を描くことが好きで、仕事の行き帰りにも絵を描き、「絵バカ」と言われていた。その彼が17歳の時、ゴッホの「ひまわり」を見て、「ワぁゴッホになる」と、画家になると決意し、「ひまわり」の絵をいつも部屋に飾り、拝むように見続けた。

チヤは、牛乳瓶の底のような眼鏡をかけた熊のような印象をもって、志功青年と出会っている。しかし、彼女は近視の志功に、魚をほぐして食べさせたり、町の案内をするなどの親切を尽くしている。志功は、新聞のゴシップ欄(?)に「チヤ様、私は貴女に惚れ申し候。ご同意なくばあきらめ候 志功」と載せた。チヤの心は全部棟方に持っていかれた。二人で、神社でお参りし結婚した。互いに強く引き合うところがあったのだ。駆け出しの画家はチヤと共に暮らすことができない。志功は絵を学ぶために上京し、新婚のチヤは実家で暮らす羽目になる。籍にも入れてない状態で長女が生まれ、友人からは騙されたのではないと言われるが、チヤは志功が一流の画家になることを信じ抜く。長女が1歳の時、上京し志功の所に押し掛ける。親子3人の居候暮らしが始まる。

極貧生活の中、チヤは4人の子どもを産む。志功は、油絵から木版画に変えていく。木版画は油絵より格下に見られたが、浮世絵は日本独特の芸術で、ゴッホも自分の絵を浮世絵風に描いているように西洋から評価された。また、目の不自由な志功は、手で触れて描ける木版画が適していた。徐々に認められていき、「大和し美し」という4枚の絵巻物の版画を完成させた。展示方法でもめている所へ、柳宗悦が通りかかり、版画を絶賛する。柳が志功のあばら家に来た時、志功は家族を隠し、独身だと言い張るが、子どもたちが柳の前に出て来る。志功は「うちのネコです」と言う。チヤも出て来て「夫猫が、大変お世話になっております」と挨拶し、皆が大爆笑する。チヤは苦労の中でも、ユーモアを解する大した女性である。柳に認められてから、棟方志功は、子どもにひもじい思いをさせることなく、墨、紙、木版を買うことに苦労しなくてもよくなった。

柳が館長に就任した日本民藝館に志功の新作版画23点の『華厳譜』は、「なんという輝き、なんという力だ!こんな粗刷りで根本的な美をもらにつきつけてくるとは!」と評された。志功は仏教を学び、規格外のスケールの仏像版画を彫り上げていった。世界の美術館で、幾多の賞を得ている。圧巻だったのは、弱視だった志功の左目が見えなくなった時、チヤに「いずれ、右目も見えねくなるかもしれぬ」と言い、目隠しをしてくれと頼む。目隠しされた志功は、手を切り、血まみれになりながら版画を彫る。壮絶なシーンで、この気迫がああ迫力を生んだのである。チヤは、志功の創作意欲がいつ爆発するか分からない、その爆発に備えて、皆が寝静まった夜、一升ビンに何本も、何十年も墨を摺り続けた。「帯」には「棟方と苦楽を共にし、支えたチヤ」と書かれ、その通りであるが、チヤの心には、私が志功を『板上に咲く』『世界のムナカタ』にしたという満足があるのではないか。